

# 博士論文審査及び最終試験の結果

審査委員（主査） 山口裕之 印

学位申請者 久野量一

論文名 「肯定の詩学」と「否定の詩学」—キューバ革命と作家たち—

## 結論及び審査の経過

久野量一氏から提出された博士学位請求論文「肯定の詩学」と「否定の詩学」—キューバ革命と作家たち—に対して、主査として予定されていた山口裕之による事前審査の後、山口裕之（主査）、野谷文昭（東京大学名誉教授・名古屋外国語大学名誉教授）、和田忠彦（東京外国語大学名誉教授）、沼野恭子、武田千香の5名からなる審査委員会は、2021年3月25日に最終試験（公開審査）を実施し、全員一致で博士（学術）の学位を授与することがふさわしい研究であるとの結論に達した。

## 論文の構成と概要

提出された論文は、1940年代から21世紀の現代にいたるキューバの文学の複雑な流れを、「肯定の詩学」と「否定の詩学」という両極的な概念の設定によって捉えなおし、この二つの「詩学」の均衡関係が変容してゆく過程を明らかにしてゆく研究である。緩やかに時間軸に沿ってたどりながらキューバの文学の流れを描き出すこの論文は、それによって一つのキューバ文学史を提示する著作ともなっている。

序章と結論に挟まれる本論は、全体として三部構成となっており、各部はそれぞれ三つの章を含んでいる。全体の構成と標題は以下の通りである。

序章 キューバ、「肯定の詩学」と「否定の詩学」

### 第一部 ピニェーラとアレナス

第一章 断片の世界—ビルヒリオ・ピニェーラを読む

第二章 ブエノスアイレスのビルヒリオ・ピニェーラ

第三章 革命とゴキブリー作家レイナルド・アレナス前夜

### 第二部 革命と知識人たち

第四章 騒々しい過去と向き合うこと —ラファエル・ロハス『安眠できぬ死者たち—キューバ知識人の革命、離反、亡命—』をめぐって

第五章 『低開発の記憶』にみるエドムンド・デスノエスの苦悩

第六章 亡命地としてのアルゼンチン

—アントニオ・ホセ・ポンテとカリブ文学研究をめぐって—

### 第三部 冷戦後のキューバ文学

第七章 一九七〇年代の革命文学 —「革命推理小説」と「テストimoniオ」—

第八章 ポストソ連時代のキューバ文学を読む —キューバはソ連をどう描いたか?—

第九章 反マッコンド文学 — 二十一世紀キューバにおける第三世界文学とダビー・トスカーナ『天啓を受けた勇者たち』

最終章 結論

問題設定と全体の構成を提示する序章では、1920年代から30年代のアヴァンギャルドの時代、それを引き継ぎつつも土着的で内部志向の「アメリカニズム」の要素へと重心を移してゆく40年代から50年代の革命期（第一部）、そして革命後の政治体制（第二部）から、ポスト冷戦の時代へとめまぐるしく揺れ動いてゆく20世紀から21世紀のキューバ文学（第三部）のうちに、「肯定の詩学」と「否定の詩学」という二つの対立的な方向性の相克のプロセスを読み取る枠組みが提示されている。

「肯定の詩学」は、キューバという土地と文化の固有性を、楽園的なユートピア的イメージによって位置づける文学上の方向性である。キューバの肯定は、革命後のキューバにとっては、革命の肯定を前提とする文学上の立場につながってゆくと久野氏はとらえる。それに対して、「否定の詩学」は、自らの生きるキューバという土地のありようを、未分化で確定しがたいもの、不気味で薄汚く猥雑なものとして描き出す。

否定的に描かれた特質によってキューバという島の真の姿に迫ろうとする「否定の詩学」の代表的な作家として、久野氏はとりわけビルヒリオ・ピニェーラに焦点を当てるが、この流れは、革命以後、弾圧の力学のうちに巻き込まれてゆく作家パディーリャに引き継がれていると見ている。久野氏は、ピニェーラからパディーリャに引き継がれていく「時代の趨勢から距離をとった眼差し」としての「否定の詩学」と、革命運動に沿ったものとしてキューバ文学の表舞台で展開してゆく「肯定の詩学」という二つの軸の実際の姿を描き出すとともに、それらの両極の均衡関係が、革命の力学のなかでどのように変容していったかを、各章の個別のケースにおいて丹念に描き出してゆく。

第一部は、革命前の「否定の詩学」の代表的作家としてピニェーラの商品をとりあげて論じるとともに（第一・二章）、革命体制と対立し続けた作家レイナルド・アレナスをとりあげることによって、キューバ文学における「否定の詩学」の姿をありありと描き出している。とりわけ第一章では、ピニェーラの短編小説「落下」をとりあげ、グロテスクな小説の描写をたどりつつ分析しているが、そこで提示されるキューバという島の姿と、同性愛者としての自らのアイデンティティをめぐる考察はきわめて魅力的なものである。

第二部では、革命後のキューバにおいて、革命の文化政策が抑圧的に働くことによって、知識人としての文学者において、「肯定の詩学」という方向性での表現活動が、現象としては展開していた経緯を描き出している。第四章は、共和国期から90年代にいたるキューバ知識人のふるまいや葛藤を歴史資料によって考察したラファエル・ロハス『安眠できぬ死者たち』（2006年）をたどりつつ、過去の文化遺産を「革命」の方向性によって一義的に解釈するのではなく、多様な読解に向けて過去の知識人の生を位置づけ直す「記憶の民主化」の作業をそこに見て取ろうとしている。第五章では、革命後の1965年に出版されたエドモンド・デスノエスの『低開発の記憶』に見られる、一見して革命に批判的な言説が実際にはどのようなディスクールの場に置かれていたものであるかを分析することによって、キューバの知識人が置かれた葛藤の状況を目に見えるものとして描き出す。そして第六章では、2000年代に活動の場をキューバからアルゼンチンに移したアントニオ・ホセ・ポンテのうちに、そこでもなお革命体制下での表現の困難さが示されていることを読み解いている。これらの章を通じて久野氏が描き出そうとしているのは、革命後、2000年以降の時代にもなお、革命体制における「正典」の力が働き続けている知識人の状況である。

このことは、最後の第三部「冷戦後のキューバ文学」においても引き継がれている。第七章では、1970年代の革命体制に沿った「革命推理小説」と「テストimoniオ（証言文学）」という二つの文学ジャンルをとりあげている。文学史的な視点からすれば一般的にはあまり重視されないこれらの文学のうちに、革命文学の「正典」としての機能がどのように組み込まれているかを、久野氏は実証的に分析する。第八章ではポスト・ソ連時代にキューバ文学に現れているように見えるノスタルジック現象のありかたを複数の作品に即して具体的に検証している。最終章となる第九章では、グローバル化時代の新しいラテンアメリカ像を標榜する新自由主義的な短編集『マッコンド』に包摂されず、それに対抗するあらたなキューバ文学の立ち位置を示すものとして、ダビー・トスカーナの『天啓を受けた勇者たち』をとりあげ、この作品をメキシコ作家によって書かれたキューバ文学として見ることによって、そこに含まれる反帝国主義、反米主義を21世紀のキューバ文学として位置づけて締めくくっている。

## 審査の概要

公開審査は、2021年3月25日に東京外国語大学において対面形式で実施された。審査では、まず久野量一氏からパワーポイントによる論文の概要説明が行われた。この概要説明は、単に構成と要旨を反復するものではなく、20世紀から21世紀にかけてのキューバ文学とその研究の流れのうちに問題の所在を明確に位置づけ、この博士学位請求論文が提示した論点を浮かび上がらせるものであった。

審査では、この論文全体の中でホセ・マルティがなぜ取り上げられていないのか、西洋的コスモポリタニズムと土着的アメリカニズムとの対置だけでなく、むしろそのつながりを考察してゆく視点もありうるのではないかと、ヨーロッパにおけるアヴァンギャルド運動克服の

方向性と対比するとき、キューバにおけるコスモポリタニズムとアメリカニズムという方向に見られる差異は何に由来するのか、ヨーロッパから帰還した作家たちが全体主義をどのように捉えたか、翻訳の体験はキューバ文学の形成において重要な役割を果たしているのではないか、とりわけ第一章に見られる身体性の描写に関連して、女性作家における身体性の緻密な描写はキューバ文学においてはどのような状況であるかといった問いが、審査員から数多く提出されたが、久野氏はこれらの多岐にわたる質問や指摘に対して、即時に適確に回答し、自らの論文の立場を示した。また、「肯定の詩学」と「否定の詩学」という二項対立的な図式のわかりやすさの反面、そこに含まれないものをどのようにとらえてゆくのか、「肯定の詩学」を単純に革命路線との一致とみなすことはできるのかという根本的な問いに対しても、この論文では細部の詳細な分析によって全体が見えなくなってしまうことを避けて、あえて大きな枠組みで明確な像を描き出しているという立場を説明するとともに、「肯定の詩学」の位置づけに対しても明確な回答を与えた。異なる地域・言語の文学研究者からなる審査委員の問いと、それに対する久野量一氏の浩瀚な知識と鋭い洞察力に裏づけされた応答は、ヨーロッパと南米文学をめぐる座談会のような豊穡さをもつものとなり、それをもってしてもこの論文が第一級の文学研究の成果をもたらしているということを証していることになるだろう。

この論文は、時代区分によって構成された三つの部分の内部で、時系列的には前後する部分も見られ、また「肯定の詩学」と「否定の詩学」が冒頭の枠組みとしては明確に示されながらも、その後の各論においてはほぼ背景に退くことによって理論的連関がやや見えにくくなるという点も指摘することができる。また、「肯定の詩学」と「否定の詩学」という図式的な二項対立についても、一方でテーゼの明確化という魅力を与えるものでありながら、他方でその単純化によって二項対立からこぼれ落ちる事象を捨象せざるをえず、作家の政治的姿勢が強調されがちになるという諸刃の剣のような状況は残り続ける。しかし、各章個々の論のなかでキューバ文学の特定の作品を捉え分け入ってゆく視点と分析力、とかく感情的に捉えられがちなキューバというテーマを著者が冷静にそして魅力的な言葉の力によって論じていることには、この研究の資質の高さが明確に現れている。そしてまた、それぞれの章での論考が単なる文献学的な分析だけによるものではなく、キューバ及びアルゼンチン（ブエノスアイレス）で久野氏がおこなったリサーチにもとづくものでもあり、とりわけ久野氏がカサ・デ・ラス・アメリカスを訪れていることはこの研究の重要性を高めるものとなっている。これらのことから、提出された論文がキューバ文学の歴史位置づけに対する重要な学術的貢献をもたらす高いレベルの研究であることを、審査委員会は全員一致で判断し、久野量一氏に博士（学術）の学位を授与することが適切であるという結論に達した。